

CBE（適性能力基盤教育）について

——ジョージア・プログラムを中心として——

河 野 昌 晴

昭和51年 9月16日受理

I. 序 論

教育は、社会的・文化的規制要因の変化にともなって、その形態・機能をたえず適合させていこうとしており、この意味では、まさに現在は世界的視野での教育の変革期にあっているとと言える。

アメリカにおいて試みられ、実施されつつある CBE (Competency Based Education, 適性能力基盤教育) もその一つの例である。現在、CB教育はアメリカの教育現場において、教育改革に熱心な教師達によって、試みられているが、どちらかと言えば実践面の方が先行している状況になっており、理論的構成の方が追随しているような傾向が見られる。この傾向は、一般的には教育史の観点から眺めた場合、新教育の初期の段階に生ずる当然の現象である。ただ、この現象はCB教育の現状とか、その理念が日本の教育界に紹介・導入されにくい原因の一つにはなっている。又、CB教育（能力基盤教育）が、過去或は現在日本で行なわれてきた能力別学習¹⁾とややもすれば同一視されるために、日本では誤解される原因ともなっている。

しかし、又、日本では現在個性に即応した教育を求めており、CB教育はCB（適性な能力に基づいての）教育を目指しているのです、その解決策の一つと見られている。

そこで以上のような観点を基礎にふまえて、CB教育の定義或は普通教育との比較等について簡単に述べてみる。

II. 定 義

CB教育 (Competency Based Education) という概念が用いられるようになったのは近年であり、この言葉が使われだして未だ日が浅いので、はっきりとした定義が未だ固まっていないのが実状であるが、その中で理論的概念を確立させるに価値があるような一般的な定義を探りあげてみる。

たとえば、ジョンソン(C. E. Johnson) の定義があるが、これによると、CBEとは、学習している事（或はまとまった活動）を成し遂げようとする時に、必要とするすべての面で、学習者を助ける一つの教育過程、或は組織である (A process or system of

education which proposes to help the learner to do all the tasks he needs to do if he is to perform the job (or other set of activities) he is learning to do.)。CB教育は「能力」(competencies, 適性能力)を基本にしている。一方、他の計画タイプは、学習者がどのくらいの量の知識を習得するかということに基礎づけられると見なされてよかるう (Competency based education is based on *competencies*, while other types of programs may be observed to be based on how much knowledge the learner acquires.)。と説明している。²⁾

次に、ここで問題にしなければならないのは、この能力 (competency, 適性能力) の意味である。この言葉も、教育上で採り上げられるようになったのは、同義語も含めて近年になってからである。³⁾

ここに、二・三めぼしい定義を採り上げてみると、クーパー (J. N. Cooper) とウェーバー (W. A. Weber) は、能力 (competencies) を児童の知的・社会的・感情的又身体的成長を促す態度・理解・技能又行動 (Attitudes, understandings, skills and behavior that facilitate intellectual, social, emotional and physical growth in children.) としている。⁴⁾

ドッドル (N. R. Dodi) は教師の能力を説明する際、能力 (competency) とは、教師が能動的に処理しなければならぬ事柄への実際の活動能力 (abilities) を示すことを意味する。教育の分野で基礎的と考えられる知識は、この観念には含まれない。代わりに、狙いは教師は何をすることが出来るかと言う能力 (competency, 適性能力) の詳細である (The term competency is applied in these materials to statements descriptive of functional abilities which teachers must exercise in the conduct of their job related activities. The knowledge considered foundational to the field of education is not included in this project. The focus instead is on specification of competency in terms of what teachers *can* do.) としている。⁵⁾

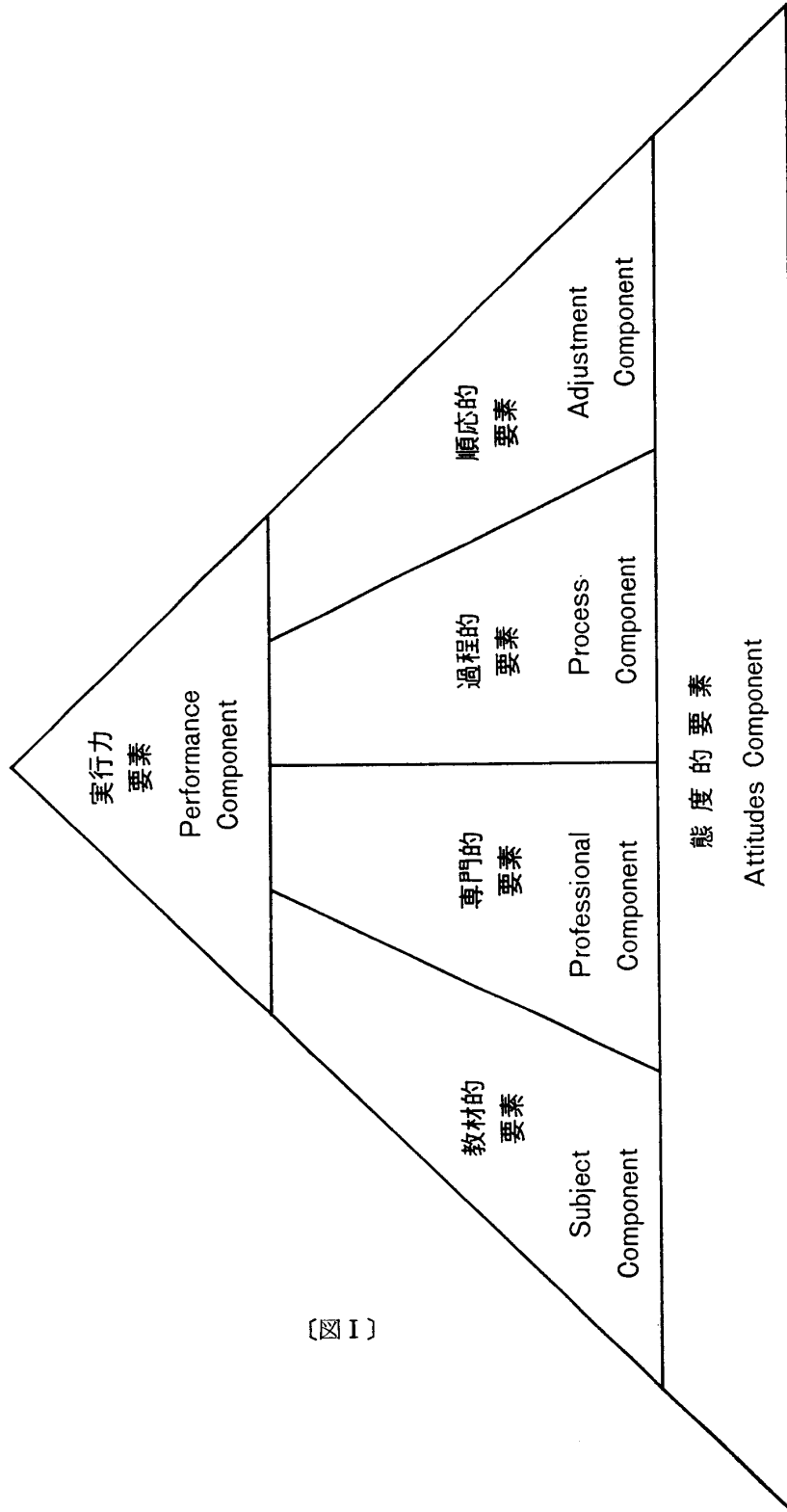
クック (F. S. Cook) 等は、実行力 (performance) と能力 (competency) との間の意味の差異は、はっきりしないと指摘している。そして又、能力に関連した事項は定義がしにくいと主張している。⁶⁾

同様に、ジョンソン (C. E. Johnson) ・シャロン (G. F. Shearron) は、1971年の時点では、能力は色々に定義されると述べているが、1974年になってジョンソン (C. E. Johnson) ・シャロン (G. F. Shearron) ・ヘンゼル (N. H. Hensel) の連名で、要求された条件に対し、事態に十分に満足のいくように対処する合理的実行力 (A rational performance which satisfactorily meets the objectives for a desired condition.) であると、能力 (a competency) の定義をしている。⁷⁾

ジョンソン (C. E. Johnson) 等は、上述の能力の定義にともなって、能力の意味や内容の理解を助けるために、能力の分類分けをしている。それによると、能力の種類として、

基本的能力 (Basic Competencies), 共通的能力 (Common Competencies), 技術的能力 (Technical Competencies), 専門的能力 (Professional Competencies) の四つに分類している。⁸⁾

又, 能力の構成の理解を助けるために, 能力の要素 (The components of competence)



〔図 I〕

を分析している。それらの要素としては、実行力、知識、技術、過程、態度などをあげている。これらの要素の関連性を、一例として図示すれば、〔図 I〕のようになる。この図は専門的教師能力の要素を示したものである。⁹⁾

この図を見ると、態度的要素が他の要素の基礎にあり、実行力要素が他の要素の上に位置している。これらの要素を簡単に説明すれば次のようになる。

実行力要素 (Performance component) には、教授能力とともに想起される実行力の外部に表われる行動的要素がはいっている。

教材的要素 (Subject component) には、能力の成就を可能にする教育目標或は教科とともに直接想起される能力の要素がはいっている。

専門的要素 (Professional component) には、原理、戦略、技術のような能力の成就を可能にする専門的教育とともに想起される能力の要素がはいっている。

過程的要素 (Process component) には、教授能力の完成をさせるような思考過程要素がはいっている。

順応的要素 (Adjustment component) には、能力の成就に対して個人的特質の個別的適応に対する本質的な要素がはいっている。

態度的要素 (Attitudes component) には、教授能力の成就の基になる態度、価値、感覚を可能にするための要素がはいっている。¹⁰⁾

要するに、能力の特質としては、一つの手順とか、きまりきった型の実行力を教えるのではなく、その時々のおかれた状況の下での最善の解決策をとることが出来る実行力を身に付けさせることであって、事前に教え覚えさせると言う知識型・記憶型ではなく、言わば探究 (inquiry) 型であるところに特長がある。¹¹⁾

III. 普通教育との比較

CB教育と現状の普通の教育とを比較することによって、CB教育の実際的特性をはっきりさせることが出来る。

CB教育の特性

1. 学生の達成の主な狙いは、効果的・有効的に仕事をなす能力である。

普通教育の特性

1. 学生の達成の主な狙いは、教科の知識並びに効果的・有効的に仕事をする方法について説明をする能力である。

2. 学生が決められた学習にとりかかれれば、時間は問題ではない。学生は他の者より早く済ますかもしれないし、一般的にかかるよりもっと時間がかかるかも知れない。
3. 成功の基準は、その仕事への能力を示すことにある。基準を達成したと言うことは、学生が上手にやり遂げたことである。
4. 受講資格は殆んど関心がない。学生は現状から始める。準備が出来ていなければ準備をすればよい。
5. 学習活動の柔軟な予定計画は本質的に学生の個人差に応ずるように準備される。学年を越えての教育機会や登録の中広い可能性がある。
6. どのように、何時、何処で学習がなされようと、はっきりした規定はない。
7. 実際的分野の経験、或は仕事上での能力の獲得への機会が用意されている。
8. 学習（能力）は、学生がその分野に関係した能力を獲得することを助けるように、小学習単位、或は結合で提示される。
9. 準備は、学生達に能力を獲得するのに種々な変化に富んだ方法で与えるために、学習スタイルが学生によって異なるように作成されている。
10. 良い教師の基準は、学生が求めている能力を獲得するのを助ける際に、どのくらい効果的・有効的に助けられるか、その大きさである。
11. プログラムの使命に関してまず合意がなければならぬ。次に使命を最も効果的かつ有効的に履行する編成や作戦が選択され、計画され、そして完成される。
12. 職員選択の基準は、計画の教育的要素の必要性に基づいている。授業をするために変異する職員構成やチーム・ティーチングが一般的に行なわれる。
13. 人間化や個性化は、組織的に教育計画の総合部分として計画されている。
2. 学生は学年・学期の限られた時間内で働く。授業時間は一般的に事前に決められている。
3. 成功の基準は、学生が教材を獲得した広がり示す試験の評点である。
4. 受講資格は非常に重要である。用意が出来ていなければ許可されない。
5. 学生は、かなりかちっとした時間で授業を予定計画されている。学年やたまに大量の登録が一般的に実施される。
6. 学園での学級教授法が教授上最も普通の方法である。一定の出席が要求されるのが一般的である。
7. 実際的分野での経験は限られている。
8. 学習（教材）は、授業時間単位で示されたコースで構成されている。
9. 講義——討論が提示の最も一般的な型である。しかし、セミナー、実験活動、限られた野外経験で補なわれてわいる。学生の学習スタイルには注意は殆んど払われていない。
10. 良い教師と言う基準は、教科についてどれ程沢山知っているか、又如何に上手にそれを示すかである。
11. 管理体制が科や部に編成される。この編成は使命が最も効果的かつ有効的に履行される範囲内ということを考慮に入れてである。科や部は時には使命の解釈において異なることがある。
12. 職員選択の基準は、しばしば学科の必要性に基づいている。授業をするために変異する職員構成やチーム・ティーチングは一般的には行なわれない。
13. 人間化や個性化は、本質的には認めているが、殆んど組織的には準備されていない。大部分は、学生の特別な要求に応えるために個々の教師に任されている。

- | | |
|--|--|
| <p>14. 計画の絶えざる評価、フィード・バック、修正が組織的に施行される。</p> <p>15. 学習者によって獲得されるべき能力を特定化することは、開業者、指導主事、大学教師、研究者、並びに影響を与え、或は学生が何を教えられるかによって影響される関係地域社会とかがかり合いになって成し遂げられる。</p> <p>16. 教師は、学生のもつ能力の性質により制限される範囲内で、彼等が強く望む能力を獲得するその大きさに責任をもつ。</p> | <p>14. 計画変更は、変更の必要性が生じた時に行なう。通常これらの変更は基本的型にはめられた変革の形態をとる。</p> <p>15. 教材は、本質的には、その課程を教える教師によって選択され、構成される。</p> <p>16. 学生は、教師によって構成や提示された目標教材の獲得に責任がある。¹²⁾</p> |
|--|--|

以上の比較により、或る程度CB教育の理論的概念が理解され、その特質を解明するのに役立つと思える。特に、現在、日本において教育改革を進めようとする際に、過去の教育と同じ弊害におち入り画一型の変革 (innovation) によろうとする傾向——これは教育に対する固定観念になっているのだろう——がみられるが、コペルニクス的転回の下での新しい次元において解決策を考える一つの指針を、CB教育は暗示している。

IV. CB教育の特長

CB教育を他の教育組織と区別する原則は沢山あるだろうが、立派なCB教育計画を樹立するために必要な、本質的な原則はそう沢山はない。

ここに、三つの仮定 (assumptions) をあげてみるが、特に新奇なものではない。しかし、CB教育を進めるに当たっての焦点であり、現在の伝統的教育に挑戦する計画の根源的原則である。

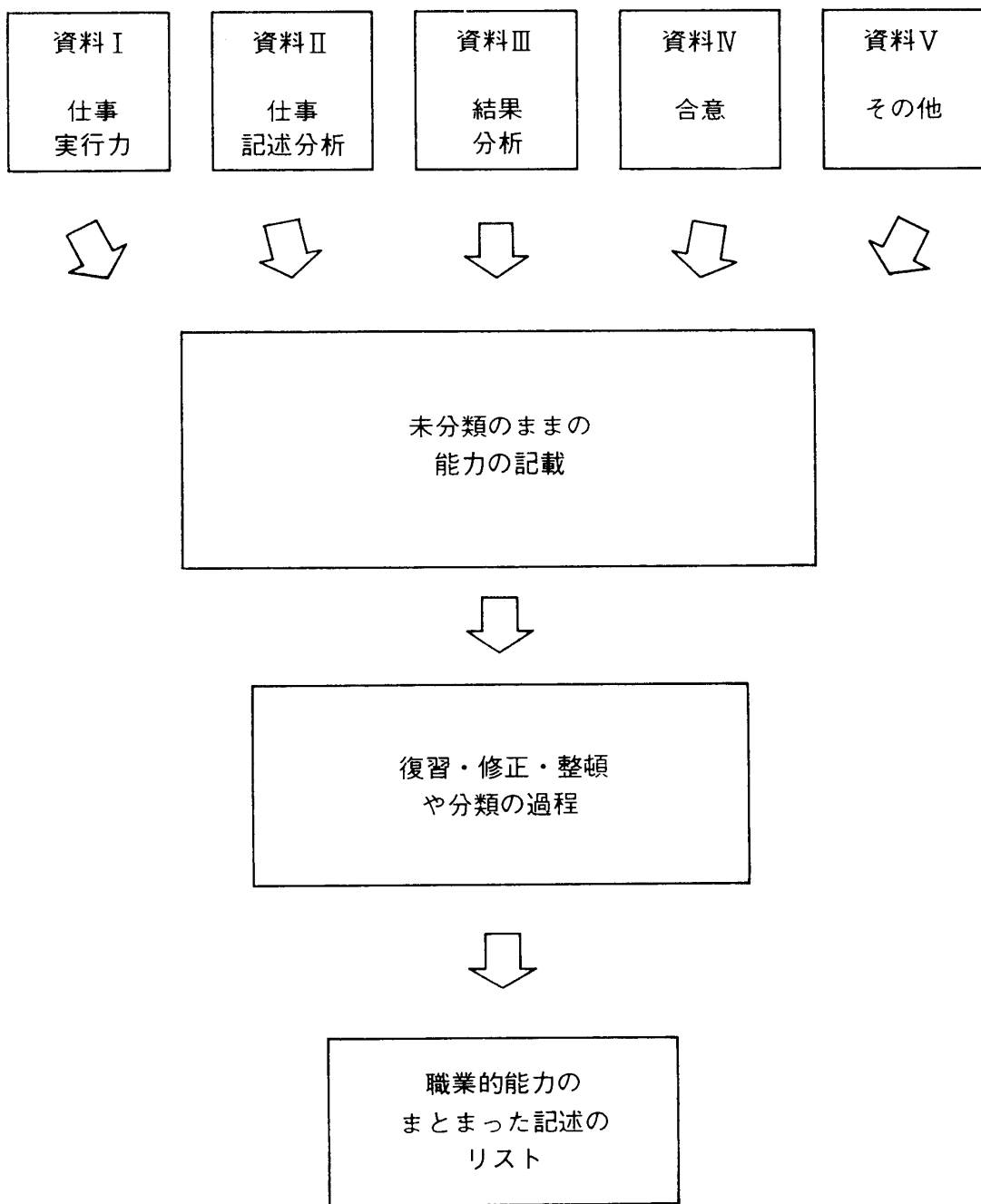
1. 教育計画は本質的に能力に基づいていなければならない (An educational program should be based on the competencies essential.)。教育計画が意図している職業への効果的実行力の能力に基づいて。
2. 教育計画は学習者の間の差異に応じて準備されるべきである (An educational program should provide for the differences among learners.)。
経験の積み重ね、成就の大きさ、学習の程度やスタイルのような差異に応じて。
3. 教育計画は管理組織により、発展され完成されるべきである (An educational program should be developed and implemented by a management system.)。
目標の望ましい質や到達する人間的手段のどちらをも妨害することなく目標達成を促進する所の管理組織により。¹³⁾

次に、この原則を実践面に反映させて、具体的条件としてあげてみれば下記のようなになる。

1. 計画は学習者達の差異に応ずるようにしなければならない (A program

should provide for differences among learners.)。

2. 計画は学習者の人間的な発達に必ずしななければならない (A program should provide for the humanistic development of the learner.)。
3. 計画は社会の場に応じての変化をを維持しなければならない (妥当でなければならない) (A program should keep up with the changes which are taking place in society.—It should be relevant.—)。
4. 計画は自己改善されねばならない, たえざる評価, フィード・バックや



〔図Ⅱ〕

修正に必ずしも応ずるようにはしなければならない (A program should be self-improving; it should provide for its continuous evaluation, feed-back and revision)。

5. 計画は学生が進歩することが出来、又、進んで進歩することに責任を持たねばならない (A program should be responsible for the extent to which capable and willing students make progress.)。
6. 計画はそれにより影響をうける誰に対しても統御出来るようにすべきである (A program should involve in its governance anyone who is affected by the program.)¹⁴⁾

ただ、ここで注意すべきことは、CB教育はあく迄、今迄の教育組織のような画一的・固定的組織又は機能を目指しているのではなく、どこ迄も学習者或は学習者の必要に応じ採られる柔軟性をもった教育組織だと言うことである。つまり、対処する態度、心構えであり、過程 (process)、探究 (inguiry) である。

そこで能力を分析する過程について、職業的能力を例にとって述べると、[図Ⅱ]のようになる。¹⁵⁾ つまり、この[図Ⅱ]のような過程を通して、CB教育の具体的計画が樹てられていくのである。

V. ま と め

CBTE (Competency Based Teacher Education) は、ジョージア大学では1968年3月から始まっている。その時の主題は、小学校教師用の計画モデルの伸展であった。そして、CB計画は、現今のアメリカ教育の進むべき方策の一つとして、いまや着実に実施されつつある。

現在、日本においても個性に応じた教育の必要性が、認められ主張されながら、その効果は今のところ殆んどあらわれていない状態である。個性を伸ばす教育とは、ある意味で個人差を助長する教育であって、各人の独自の潜在能力 (unique potentialities) を見だし、とり上げて、育て伸ばすことにある。又、一面、社会は過去のような静態的 (static) 社会ではなく、動態的 (dynamic) 社会に移行し、このような社会においては、結果 (知識) を教えるのではなくて、問題を解決する過程、或は態度を教えなければならなくなっている。しかも、将来を予想して解決策を与える準備教育等の如きは、この変わりゆく社会 (changing society) の下においては、始めから考えることも出来ない。その意味で、現今の教育は既に述べたように探究 (inguiry) にあるとも言われているのである。教材を通しての知識・技術の習得は必要であるが、それはあく迄基礎であり、手段であり (換言すれば道具であり)、それ自体は今や教育の目的ではない。¹⁶⁾

現在の教育の狙いは、あく迄学習者が問題に直面した時、その環境の中で最も適切にそ

れを解決することが出来る実行の力でなければならない。もし、それが解決できなければ、すべて(学習)は何にもならないのである。同時に、同じ環境で同じ解決すべき問題であっても、人によりその解決策は異なり、同じ人間でもその時により解決方法は、当然異なり得るのであって、¹⁷⁾ここに知識型の教育のような同じ環境、同じ条件なら、同じ解決策であると言う発想とは次元的に異なっているのである。そこにCB教育の狙いがある。人間生成(Menschwerden)の教育、個性教育と口に出して言うのはたやすいが、現今の画一型教育の下での理念では、具体化の方策を見いだすことは出来ない。

遅ればせながら、日本の教育もこの点について関心をもちだしてきた。未来の要求に応えることが出来る教育を、現在我々は模索しているのであるが、その模索の一つとしてCB教育をとり上げてみた。

(註)

- 1) 河野昌晴：学校教育の再構成，明玄書房，昭和42年，p. 85, pp. 92~93. 参照
- 2) C. E. Johnson: *Interpretations for Some Terms Frequently Used with Competency Based Education*, UGA, 1974, p. 1.
- 3) 1972年には、未だERIC (Educational Resources Information Center) の Thesaurus of ERIC Descriptors は、項目に採り上げていない。
- 4) ネピア (Napier) も殆んど同じ定義をしている。
Those attitudes, understandings, skills and behaviors which are thought to facilitate intellectual, social, emotional and physical growth in children.
- 5) N. R. Dodl: *Catalog of Teacher Competencies*, FSU, 1972, p. 2.
- 6) F. S. Cook, C. L. Nuhauser and R. C. Richey: *A Working Model of a Competency-Based Teacher Education System*, Wayne State Univ., 1972, p. 2.
- 7) C. E. Johnson, G. F. Shearron and N. H. Hensel: *A Meaning for Competency*, UGA, 1974, pp. 4~5.
- 8) *Ibid.*, pp. 7~9.
- 9) *Ibid.*, pp. 11~14.
- 10) *Ibid.*, pp. 15~24.
- 11) 河野昌晴: *Op. cit.*, p. 63.
- 12) C. E. Johnson: *Competency Based vs. Common Educational Practices*, UGA, 1972, pp. 1~4.
- 13) C. E. Johnson: *Competency Based Programs for Preparing Professional and Technical Workers*, UGA, 1973, p. 2.
- 14) C. E. Johnson, G. F. Shearron: *Specifying and Writing Occupational Competencies*, UGA, 1975, p. 5.
- 15) *Ibid.*, p. 21.
- 16) 河野昌晴: *Op. cit.*, p. 20. 参照
- 17) C. E. Johnson, G. F. Shearron and N. H. Hensel: *A Meaning for Competency*, UGA, 1974, p. 11.

About Competency Based Education (CBE)

——Centering around the Georgia Program——

Masaharu KOHNO

We are eagerly seeking new developments in technology, and the recent creation of promising innovations in education.

This paper is an introduction to competency based education (CBE).

CB education suggests a contemporary viewpoint as to the kinds of programs for new education which will be needed to meet the demands of the future.